

日本人学生の留学経験と自己に関する意識の変化に関する縦断的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 早矢仕, 彩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000442

日本人学生の留学体験と自己に関する 意識の変化に関する縦断的研究

早 矢 仕 彩 子

近年、異文化体験を持つ日本人、特に青少年数は飛躍的に増加している。今後も更にその数の増加が予想されるいま、異文化体験が青少年に与える影響について研究を行うことは意義深いことと思われる。

田中・虎田・小林(1972)は、旅行という短期的な異文化経験でも、旅行前・後では青年の他国に関する印象が変化することをSD法を用いて見だし、安福(1994)はたとえグループ旅行であっても、海外旅行経験が人の考え方に多大の影響を与える可能性があることを指摘しているが、異文化環境に一定期間滞在する留学では、さらに大きな影響があるのではないかと考えられる。

かつては、留学といえば多くは選抜試験に合格した上での選ばれた者の公費による留学であり、そのような時代の日本人留学生研究では、被験者は必然的に国費による派遣留学生(山本,1986)、AFS留学生(星野・長井,1988)など、いわばエリートたちであった。しかし近年は、円高、海外への抵抗感の減少、英語習得熱、仲介機関による手続きの簡略化などから、私費外国留学が手軽になされるようになってきている。留学が少数の選ばれたエリート達のものであった時代はもはや過ぎ、いまや留学は、誰にでもできる大衆のものとなっている。

本研究は、これからますます増加するであろう、エリートとはいえないごく普通の日本人青年の海外留学経験が、彼らにどのような影響を及ぼすのかを、自尊感情、自己効力感、自己意識など自己に関する意識をてがかりにしながら明らかにし、留学が彼等のその後にどのような意義を持つのかを考察するためにおこなわれたものである。留学経験による自己に関する意識の変化に関する研究としては、星野・長井(1988)のAFS高校生の縦断的調査研究において、留学経験高校生群の自己評価が高まる傾向が指摘されている。また、日本で学ぶアジア出身就学生において、自己に関する意識が適応感に影響するということが明らかにされている(早矢仕,1996,1997)。

本論文では第1に、留学前・中・後の3回の縦断的調査によって、自尊感情

尺度，自己効力感尺度，自己意識3尺度等の変化を捉え，適応感との関連を検討する．第2に，留学前・中・後3回分そろったデータから，自尊感情，自己効力感の具体的な個人レベルでの変化の様子を捉える．第3に，帰国後の面接調査結果の分析から，彼らの留学経験の意義を考察する．

研究 I

研究方法：質問紙調査

調査対象者：1994-95年，1995-96年，1996-97年に米国，豪州，英国に留学した名古屋市立専門学校留学コース生（全日3年制，2年次に約9ヶ月間の留学）に対して留学前・中・後各1回計3回ずつの質問紙調査を行った．

調査時期・調査手続

留学前：出発前1～2ヶ月，学校で担当教師により配布，家庭又は教室で記入後郵送または担当教師あるいは調査者により回収．留学中：留学後5～6ヶ月，フォローのため渡航する担当教師に託し，現地での記入後，担当教師の持ち帰り，郵送，現地担当者への提出などにより回収．帰国後：帰国後1～4ヶ月（留学終了後帰国までの期間は個人により異なるため），後期授業開始時，教室にて記入．いずれも無記名とし，イニシャルや特定のマーク記入によって，3回の回答用紙が同一人物のものと同定できるように計画した．

質問紙の構成 フェイスシート等の他，以下の各尺度の評定を求めた．留学前：Rosenberg (1965) の自尊感情尺度10項目（1年目なし），Shererら (1982) の一般的自己効力感尺度17項目，辻 (1993) の自己意識尺度27項目（1年目なし）．留学中：Rosenberg の自尊感情尺度10項目，Shererらの一般自己効力感尺度17項目，早矢仕 (1997) の社会生活スキル尺度20項目及び適応感尺度23項目．帰国後：Rosenberg の自尊感情尺度10項目，Shererらの自己効力感尺度17項目，辻の自己意識尺度27項目．

なお社会生活スキル尺度は，異文化環境での生活スキルを測定するために構成された6段階尺度で，①日常生活スキル②対人関係スキル③コミュニケーションスキル（語学力を含む）④文化にかなった行動のためのスキル，の4分野にわたる20項目を自己評定させるものである．また適応感尺度23項目は，在日留学生の日本社会での適応感を測定するために構成された早矢仕の尺度を，日本人留学生用に一部表現を修正して用いた．

回収率：留学前の留学コース生総数は1年目58名，2年目54名，3年目52名であり，有効回答回収率はそれぞれ1年目留学前60.3% 留学中55.2% 帰

国後 50.0%， 2 年目留学前 70% 留学中 44.4% 帰国後 46.3%， 3 年目留学前 67.3% 留学中 50.0% 帰国後 63.5%であった。 Table 1 に全被験者と有効回答回答者の内訳を記した。

Table 1
被験者・有効回答数（率）一覧

	留学コース全学生数			留学地	有効回答数（回答率（%））			年齢幅	異文化経験の有無		
	男	女	計		留学前	留学中	帰国後		無	有	不明
1994 - 95 留学生	20	38	58	米6豪1	35(60.3)	32(55.2)	29(50.0)	19 ~ 22 歳	23	37	22
1995 - 96 留学生	29	24	53	米5豪1英1	35(70.0)	24(44.4)	25(46.3)	19 ~ 26 歳	20	43	13
1996 - 97 留学生	27	25	52	米3豪1英	35(67.3)	26(50.0)	33(63.5)	18 ~ 21 歳	21	35	24
計	76	87	163		105(64.4)	82(50.3)	87(53.4)		64	117	59

結 果

各尺度を検討するため、尺度間相関をとり、クロンバックの α 係数を計算した。 α 係数より、各尺度の内的整合性は十分であると判断した (Table 2)。また、自尊感情、自己効力感、社会生活スキル、適応感の間にはそれぞれ正の相関が見られた (Table 2)。自己意識3尺度と自尊感情、自己効力感との関連について見ると、比較的相関が高いのは社会的不安のみであり (逆相関)、私的自己意識、公的自己意識はあまり相関を示さなかった (Table 2)。

Table 2
尺度平均値、尺度間相関と α 係数

	自尊感情	自己効力感	社会生活スキル	適応感	私的自己意識	公的自己意識	社会的不安	平均値(SD)	N
自尊感情	(.822)	.663***	.545***	.580***	.049	-.053	-.485***	38.36(8.39)	238
自己効力感		(.903)	.589***	.445***	.199*	.010	-.529***	65.88(13.33)	272
社会生活スキル			(.928)	.632***	.	.	.	90.43(15.23)	80
適応感				(.895)	.	.	.	96.47(17.49)	81
私的自己意識					(.755)	.390***	.183*	26.16(5.64)	157
公的自己意識						(.753)	.400***	31.69(6.04)	157
社会的不安							(.809)	21.03(6.01)	157

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$. () 内は信頼性係数 Cronbach α

留学前、留学中、帰国後の3時点における自尊感情、自己効力感の平均値は、自尊感情は留学中が最大、ついで帰国後、留学前となっており、分散分析の結

果留学前と帰国後、留学前と帰国後の間に TUKEY 法による検定で有意差がみられた (Table 3)。自己効力感も同じ順で大きくなっているが、平均値の差は、留学前と留学中のみ有意であった。

Table 3

自尊感情、自己効力感尺度値の平均値(標準偏差)と有意差検定結果(TUKEY の検定)

	留学前(1) N=105	留学中(2) N=82	帰国後(3) N=87	df	F	多重比較 (p < .05)
自尊感情	35.04(7.38)	40.21(9.18)	39.30(7.66)	2 / 235	8.50	(1)>(2) (1)>(3)
自己効力感	63.57(13.83)	68.40(13.10)	66.34(12.59)	2 / 269	3.11	(1)>(2)

私的自己意識、公的自己意識、社会的不安の3つの自己意識尺度の留学前、帰国後の平均値では、公的自己意識のみに有意差が見られた (Table 4)。

Table 4

自己意識3尺度値の平均値(標準偏差)と有意差検定結果(t検定)

	留学前 N=70	帰国後 N=87	t 値	df	有意水準
私的自己意識	25.90(6.01)	26.37(5.36)	- 0.509	139.7	n.s.
公的自己意識	32.84(6.21)	30.77(5.78)	2.144*	143.1	p < .05
社会的不安	21.83(5.80)	20.39(6.14)	1.504	151.1	n.s.

*p < .05, **p < .01, ***p < .001.

各尺度に関して性差を検討したが、いずれも有意差は見いだせなかったため、以後全データで分析を行った。

以前の異文化経験の有無による2グループで各尺度の平均値の差の検定を行ったところ、適応感、社会生活スキル尺度では有意差はなかったが、自己効力感、自尊感情は異文化経験有群の方が有意に尺度値が高く、自己効力感、自尊感情は有意に高い値を示す傾向が見られた (Table 5)。

Table 5

異文化経験有群・無群の尺度平均値(標準偏差)と有意差検定結果(t検定)

	異文化経験無群	異文化経験有群	t 値	df	有意水準
自尊感情	35.80(9.04) N = 49	38.37(7.56) N = 98	-1.720*	82.4	p < .1
自己効力感	61.80(14.26) N = 64	66.57(12.66) N = 116	-2.239*	117.5	p < .05
社会生活スキル	85.80(24.56) N = 10	91.59(13.20) N = 27	-0.709	11.0	n.s.
適応感	99.90(25.17) N = 10	99.21(14.72) N = 28	0.081	11.3	n.s.

*p < .1, *p < .05, **p < .01, ***p < .001.

以前の異文化経験有群，無群の自尊感情，自己効力感，社会生活スキル，適応感の尺度間相関を比較検討してみると，異文化経験無群では相関がすべてにおいて高いが，異文化経験有群では比較すると低く (Table 6)，特に自尊感情と社会生活スキル，自尊感情と適応感，自己効力感と適応感の相関が，異文化経験無群より低い。

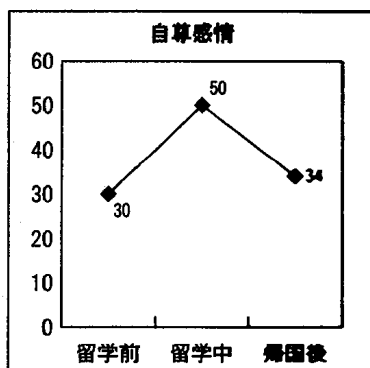
Table 6
異文化経験有群・無群別尺度間相関

異文化経験無群					
	自尊感情	自己効力感	社会生活スキル	適応感	平均値 (分散)
自尊感情		.785***	.829**	.903***	35.79 (9.03) N = 49
自己効力感			.775**	.837**	61.80 (14.26) N = 64
社会生活スキル				.924***	85.80 (24.56) N = 10
適応感					99.90 (25.17) N = 10
異文化経験有群					
	自尊感情	自己効力感	社会生活スキル	適応感	平均値 (分散)
自尊感情		.634***	.386*	.363	38.38 (7.56) N= 98
自己効力感			.616***	.294	66.58 (12.66) N=116
社会生活スキル				.622***	91.59 (13.20) N= 27
適応感					99.21 (14.72) N= 28

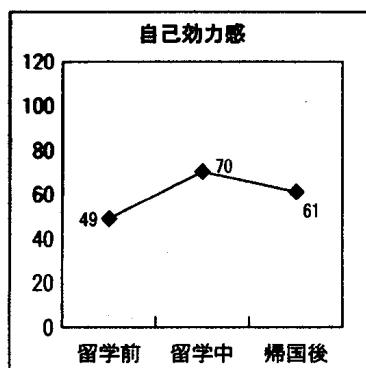
*p < .05, **p < .01, ***p < .001.

次に，イニシャルやマーク等により同一人物の3回回答分と同定されたデータにより，自尊感情，自己効力感の変化の様子を一人ずつ検討したところ (1年目：8名分，2年目：10名分 3年目：7名分)，変化は必ずしもグループ全体の平均値の推移のようなパターンを示すものばかりではないことがわかった。自尊感情，自己効力感の尺度値の個人における3時点の変化を見たとき，留学中に一番高く，帰国後には留学中よりも低くなる山形プロフィールを示すもの，留学前よりも留学中の方が低く帰国後にはまた高くなるという谷形プロフィールを示すもの，留学前，留学中，帰国後とだんだん高くなる (または少数だが低くなる)，という直線形プロフィールを示すもの，また3時点でほとんど変化がないものなどの形が見られた (Figure 1) (Table 7)。

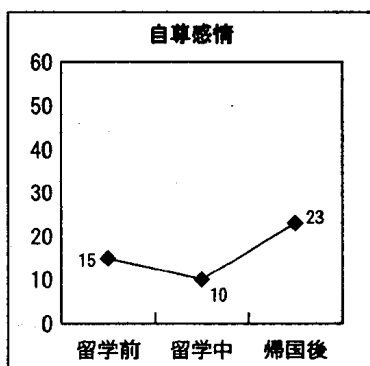
山型 (留学前 < 帰国後)



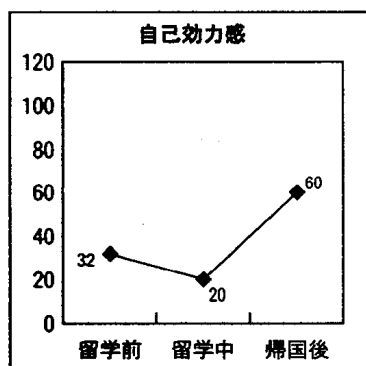
9596004



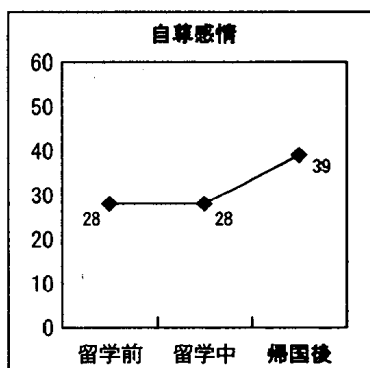
谷型 (留学前 < 帰国後)



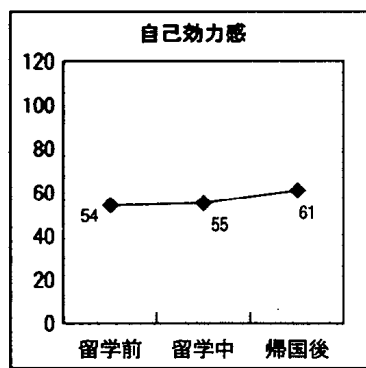
9697006



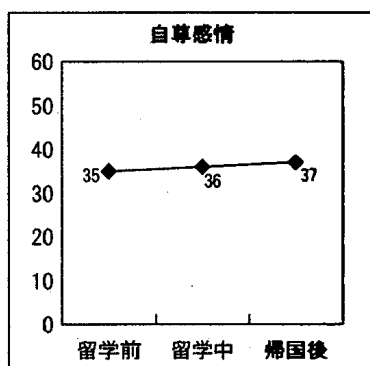
右上り型



9596003



不変型



9697002

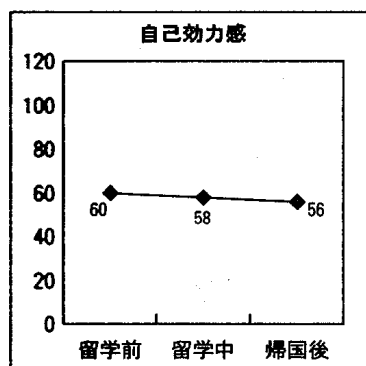


Figure 1 自尊感情、自己効力感の変化のパターン (グラフ上の数字は被験者番号)

Table 7
留学前・中・後の尺度値変化型別分類

	自尊感情 N = 17	自己効力感 N = 25
山型 (留学前<帰国後)	6	6
山型 (留学前>帰国後)	0	3
谷型 (留学前<帰国後)	5	6
谷型 (留学前>帰国後)	0	1
右上り型 (含前中・中後同値)	3	6
不変型 (留学前±1の範囲内)	2	2
右下り型	1	1
<hr/>		
留学前<帰国後	14	18
不変	2	5
留学前>帰国後	1	2
<hr/>		
自尊感情と自己効力感変化型		一致 8名
(N = 17)		不一致 9名

註 自尊感情 N = 17 となっているのは、1年目の自尊感情測定は留学中、帰国後の2回のみで、1年目の8名に関しては3時点のグラフを描くことができなかったことによる。

考 察

留学中は、沢山のことを経験した、以前とは同じではない自己を認知すること、欠点指摘・叱咤激励の日本文化圏から、ほめる文化圏（北山，1998）で5～6ヶ月学生生活を送ったことなど色々な要因によって、自尊感情が高まりを見せたと思われる。また異文化圏で外国語を使いながら留学生活を送り、いろいろな新しい経験をするうちに、自己効力感もまた上昇したと考えられる。しかし帰国後は留学中に比べるといずれも下降傾向となっている。それでも自尊感情は留学前と比べるとまだ有意に高い平均値差を保っていたが、自己効力感帰国後はすでに有意な差ではなくなっている。この理由としては、自己効力感、実際の行動結果やこれからの行動における成功見込みなどに基づいて形成される部分が大であるところから、帰国後にもとの環境に戻って、留学地で形成したやり方が日本社会では通用しないなどの理由で、留学地で感じていたの

と同水準の自己効力感を日本社会で保つことは難しく、それに比較すると、自己の価値を絶対評価する感情からなる部分が大きい自尊感情のほうが、帰国後まで保たれやすいためと考えられる。

留学中に測定した留学地での適応感は、留学地における社会生活スキル、自尊感情、自己効力感とそれぞれ相関が高く、留学地における適応感は自己に関する意識に関連が高いという早矢仕（1997）の結果を裏づけるものである。しかし、これまでの異文化経験の有無で検討した場合、はじめての海外経験では自尊感情、自己効力感、社会生活スキル、適応感がすべて影響し合う傾向が強いが、海外経験有群では必ずしもそうではないようである。海外経験有群は、自尊感情と自己効力感、特に自己効力感は異文化経験無群と比較して有意に高いにもかかわらず、社会生活スキルや適応感には海外経験無群と有意な差はない（Table 5）。したがって、自尊感情や自己効力感の高さが強く適応感に影響するということは、はじめての異文化経験者についてのみ言えることと解釈した方がよいのかもしれない。これについては異文化経験有群、無群の間でさらなる調査が必要である。

自己意識3尺度と自尊感情、自己効力感の相関について言えば、自尊感情尺度は、自己が感じる根元的な自己の価値に関する主観的な捉えを問う尺度であり、自己効力感も、これから物事をやっていく際に自分がどのようにうまくやれると感じているかという主観的な感覚を問う尺度であるので、他の人にどのように見えるか気にすることや、自分が自分にどれだけ敏感かということとはあまり関連しないらしく、私的自己意識尺度、公的自己意識尺度とはあまり相関が見られなかった。ところが、社会的不安は、他人の反応に対する敏感さを問う尺度であるから、他人からの評価に対する懸念は自己評価と密接に結びついており、その結果自尊感情や自己効力感とは逆相関が見られたと解釈することができる。

自己意識3尺度の平均値の変化を見ると、公的自己意識は留学前と帰国後とでは有意に低くなっている。これは、留学前に比べて帰国後のほうが、自己の外面が他の人にどう見られるかということに関して気にする度合いが低くなったことを示す。後述する面接調査の中での、あまり人の目を気にしなくなった、あまり服装に構わなくなった、という声は、この結果と符合する。ところが社会的不安は、尺度平均値は少し低くはなっているが、有意な差ではない。社会的不安は自己評価と大きく結びついて、自尊感情や自己効力感が上昇すればいずれ社会的不安は減少するのではないかと考えられるのだが、自己効

力感が上昇するには時間を要すること、帰国後はまた自己効力感が下降傾向に転じたことを考えると、社会的不安は1年未満の留学期間では明確には低下するまでには至らなかったということであろう。Buss (1980) は対人不安と公的
自己意識の密接な関連を主張し、辻 (1994) は必ずしも密接な関連があるとは言えないとしているが、本研究の結果は、辻の見解に近いものとなった。

3回分そろった個人データにより自尊感情、自己効力感の変化の様子を検討し、いろいろなパターンがあることが確認されたが、この理由として二つが考えられ、一つは周囲の変化をどのように感じるかという個人の側の内的な要因であり、いま一つは、留学地での経験の質の違いという外的な要因である。

個人の側の内的な要因として、留学前の日本社会における個人の、自己の社会内における位置づけの意識が大きく関連するのではないかと考えられる。いま社会における自己の能力を、社会全体の人々を参照してどのくらいの地位にあると認知するかを「社会能力地位」の認知と呼ぶと、ごく一般的に言えば、日本社会で自己の「社会能力地位」を高く認知していたものほど、異文化社会に移動したときにその社会での自己の「社会能力地位」を低く認知しやすく、また逆に日本社会で低く認知していたものほど、異文化社会に移動したことによって相対的に高く認知しやすいということが考えられる (早矢仕, 1999)。このような、もともとの個人の社会内における自己の能力に関する認知の違いが、異文化社会に行ったときにその地での自己の能力に関する認知に影響し、それが間接的に自尊感情や自己効力感に影響すると考えれば、この変化パターンのちがいを説明できるのではないかと考える。しかしこの概念そのものについても、また変化のメカニズムについても、今後十分な検討をして行かなくてはならない。

また、留学地での経験の質の違いという外的要因の影響についても考える必要がある。留学生活での経験内容は、人により時により大いに異なるからである。困難な事態への遭遇の多少、失敗経験の多少、成功経験の多少、楽しんだ者ホームシックなどのために楽しめなかった者等、留学経験にはさまざまな形がある。しかし、今回の研究は無記名調査であったため面接データとの突き合わせが困難で、この点の確認が出来なかった。そのため、経験の質との関連については推測の域を出ない。

この質問紙調査には方法論的な反省点が多い。それぞれの年度に3回、同一グループに対して調査をしたが、同一学生が3回とも回答を提出しているとは限らない。従って、このデータを厳密な意味では縦断データとは言えないのか

もしれないが、同一グループを対象にした3回の調査であるという意味で、縦断データと見なして分析を行った。このあたりも、記名式にするなどして、より厳密な意味での縦断データをとる工夫が必要だったとの反省がある。また記名式で行えば、3回分の同定がたやすくなり、より多くのデータによって変化パターンの検討が出来たであろう。

研究Ⅱ

研究方法：面接調査

面接対象：1996年卒業留学コース生（1994-95年留学）のうち協力者29名

面接時期：1995年11～12月

面接場所：学校内学生相談室

面接方法：20～30分間のラポールのための雑談後、半構造的面接40分～1時間 被験者の了解のもとにすべてを録音し逐語録を作成した。

結果と考察

「今回の留学体験を一言で表現すると、どういう言葉になりますか」の問いに対する回答をTable 8に示した。この問いは、一言という制限の中で留学生生活を表現させることによって、被験者が留学生生活をどのように捉えているかを、端的に理解するために行ったものである。

一言表現を、そのニュアンスによって、肯定的、否定的、中立的の3カテゴリーに判定したところ、圧倒的に肯定的が多かった（Table 8）。「楽しかった」4名、「夢のよう」、「夢を見つけた」、「素敵だった」、「最高」、「満足」、「良かった」などである。「帰りたい」、と再び留学生活に戻りたい気持ちを表現したものもある。

冷静な表現としては、「自分のためになった」、「とても充実していた」、「勉強の時期だった」、「本当に踏み出せる一歩」、「自分を磨く留学」、「生き方を変えてくれた」、「すごく良い経験をした」、「性格に変化を与えられた」、「進化」などがあり、いずれも留学生活が、自分にとって、何らかのプラスになったと言っている。

楽しいばかりではなく大変だったという表現も、「ハードだった」、「右往左往してた」、「苦勞は買ってでもしろ」など3名によってなされている。これらと、「百聞は一見にしかず」、「生活」は中立的ニュアンスのカテゴリーと判定した。しかしこの5名の面接の他の部分からは、いずれも留学生活に満足していることが窺え、一言表現は中立的なものではあったが、留学生活全体については、

Table 8 面接調査被験者一覧と留學生活に対する一言感想

被験者	性別	留學地	海外経験	一言感想	肯定否定
No.1	男	AR	NONE	本当に自分のためになった。	肯定的
No.2	女	PA	TOUR	私にとって宝物 人生最大のイベントって言うてもいいほど。	肯定的
No.3	女	AR	HOME	楽しかった。また行きたい。	肯定的
No.4	女	PA	HOME	ハードだった。流されないようにするのがたいへんだった。	中立
No.5	女	UR	NONE	百聞は一見にしかず いい意味でも悪い意味でも。	中立
No.6	男	UR	NONE	楽しかった。	肯定的
No.7	女	ED	TOUR	満足	肯定的
No.8	女	FL	1MON	夢のような留學でした。	肯定的
No.9	男	UR	HOME	良かった。	肯定的
No.10	男	PA	3MON	とても充実してた。	肯定的
No.11	女	NE	1MON	勉強の時期だった。英語や教科書ではなく、人間関係とか。	中立
No.12	女	PA	TOUR	本当に踏み出せる一歩、留學は私にとって大きいチャンスだった。	肯定的
No.13	女	PH	NONE	今までで最高の時だった。	肯定的
No.14	女	PH	NONE	楽しかった。今までの中で一番頑張った時期だった。	肯定的
No.15	女	UR	3MON	あれですごい変わった。今回は自分を磨く留學。	肯定的
No.16	女	NE	TOUR	素敵だった。	肯定的
No.17	男	UR	NONE	楽しかった。	肯定的
No.18	女	UR	NONE	素晴らしかった。真剣に人生を送った一瞬だった。	肯定的
No.19	男	PH	NONE	帰りたい。	肯定的
No.20	女	ED	NONE	今までの人生の中で最高な一年だった。	肯定的
No.21	女	AR	HOME	生き方を変えてくれた。	肯定的
No.22	女	PA	TOUR	すごくいい経験をした。	肯定的
No.23	女	PA	HOME	生活。	中立
No.24	女	NE	HOME	性格に変化を与えられた。	肯定的
No.25	女	PA	NONE	苦勞は買ってでもしろ。	肯定的
No.26	女	UR	TOUR	右往左往してた。	中立
No.27	女	AR	HOME	夢を見つけた9ヶ月だった。	肯定的
No.28	男	ED	HOME	苦惱。	否定的
No.29	女	NE	CAMP	進化。	肯定的
男	7名	何らかの海外経験有り		19名	肯定的 22
女	22名	海外経験無し		10名	中立 5
					否定的 1

註 以前の海外経験欄の記号は、NONE: なし TOUR: 旅行 HOME: ホームステイプログラム 1MON: 1ヶ月間の海外研修 3MON: 3ヶ月間の留學 CAMP: 国際子どもキャンプをそれぞれ表す。留學地は、AR UR ED FL PH NE がそれぞれアメリカ合衆国内、PA はオーストラリアの、町又は州名を示す。

実はどちらかと言えば肯定的である。また否定的ニュアンスの表現は「苦悩」と発言した1名によってなされているが、彼は面接の中で、卒業後の再留学を語っている。再留学を親はあまり賛成ではないが、自らの意思によって決めたとのこと。そのことは、決して留学経験を否定しているわけではないことを示している。このように見ると、29名のほとんどが、自己の留学経験を肯定的に捉えているということが出来る。

「今回の留学で何か自分が変わったと思うことがありますか、あるとすれば何ですか」に対する答えを、KJ法によって分類し、結果はTable 9に示した。

Table 9 「自己の変化」回答整理カテゴリ並びに回答人数

1. 性格, 行動の変化	35
101 性格が変わった	18
102 行動が変化した	17
2. 考え方, 価値観の変化	89
201 自分を知った	12
202 やって出来た→自己効力感	14
203 自信→自尊感情	7
204 視野が広がった	4
205 多様な考え方多様な生き方を知った	6
206 他の人の気持が分かるようになった	1
207 親のありがたさが分かった	5
208 偏見ステレオタイプの減少	11
209 アジアへの目	4
210 日本への目	7
211 国際感覚	6
212 その他考え方の変化	12
3. 生き方変化の契機	19
301 人生が変わった. 仕事, 進路, 恋人	11
302 将来の進路, やりたいことがはっきりした	8

註 101～302の下位カテゴリでは実人数をカウントした。1, 2, 3の上位カテゴリの回答人数は、下位カテゴリの実人数を合計した数を示し、従って同じ回答者が複数回カウントされている場合もある。

自己の変化は、性格・行動の変化、考え方・価値観の変化、生き方の変化の契機、その他の4つに分けられる。中でも「自分の性格が変わった」は18人、

「行動が変化した」は17人である。このどちらかのカテゴリに入る回答を1つもしなかったものは6名のみであり、29名中23名が、そのどちらかまたは両方が変わったと述べている。行動が変化したという主な内容は、積極的になった、人目を気にしなくなった、一人で行動できるようになった、依存心がなくなった、素直になった、などである。

考え方や価値観が変わったという回答は多く、のべ89人にも及んでいる。このカテゴリの回答を全くしなかったのは3名のみで、26名は何らかの考え方や価値観の変化が生じたと考えている。うち、自分を知ったという回答は12名から出ている。

やって出来たという自信（自己効力感）のカテゴリの叙述は14名によって述べられている。それらは、①出来ないと思っていたことが自分に出来た、自分にもこんな力があつたんだというもの、②人に依存せず自分一人で考え、行動することが出来るようになったというもの、③さらにそれによって、今後出逢うかもしれない困難を乗り越えることが出来るというもの、の3つに分けられる。また、自分はこれでいいんだとの確認が出来たという意味での自信（自尊感情）については、9叙述が7名によって語られている。

そのほか主なところでは「視野が広がった」が4名によって語られている。実際に自分の目で見、肌で感じた外国は印象が深く、短期間のうちに多くのものを見たり吸収した自己を、視野が広がった、と表現しているのであろう。また広くはこのカテゴリに含まれるが、特に人に関しての視野という側面を言い表したのが、「多様な考え方、多様な生き方を知った」というカテゴリで、6名が叙述している。「親のありがたさがわかった」というものも5名いる。当たり前のこととして側にいた親を、距離を置いてみることによって、その見方に変化が生じたと思われる。

偏見を自分の目で見、肌で感じたり、また自然なつきあいをするうちに偏見やステレオタイプがなくなったと答えているのは11名である。日本以外の国を見ることによって、今まで当たり前と思っていたことを見直して、日本に対する認識が変わったり、日本人、日本文化を見直したり、また批判的になったり、ということが起こっている。これに関する発言は7名からなされている。

さらに、留学の経験を通して、これから先の人生を考えたり、自分のやるべきことが分かったりというような、留学が今後の人生にとって大きな転機となると感じたものも少なくない。今後の生き方がはっきり変わったというもの11名、やりたいことがはっきりしたので将来の進路がほぼ見えてきたという発言

をしたもの8名の、計19名（重なりなし17名）、29名中実に17名までが、この留學生活が今後の生き方の指針を与えてくれたことを述べている。

また「留學によってあなたが得たものは何ですか」、に対する回答はTable 10に示したとおりである。

Table 10 「留學生活で得たもの」回答整理カテゴリー並びに回答人数

1. 経験	10
101 これまでの人生で一番よく勉強した経験	5
102 外国で生活（一人暮らし）が出来たという経験	5
2. 人とのつき合い	23
201 友人、人との出会い 日本社会では出会えない人	18
202 外国での日本社会→人づきあいを学んだ	5
3. その他	17
301 英語力	9
302 外国の方が住みやすいという感覚	8

註 101～302の下位カテゴリーでは実人数をカウントした。1, 2, 3の上位カテゴリーの回答人数は、下位カテゴリーの実人数を合計した数を示し、従って同じ回答者が複数回カウントされている場合もある。

最も多かった答えは、「人との出会い」という答えであった。留學国の人々や各国からの留學生はもとより、日本国内では接する機会のほとんどないような日本人達との交流の機会が得られたこと、そのような人々とともに過ごした経験、その間に育まれた友情が、大切なこととして面接の中で語られている。

日本の、偏差値輪切りの結果形成される、比較的等質な集団内およびその周辺の環境での生活から、周囲に多種多層の人々のいる留學地環境での生活への変化は、さまざまな人の存在、さまざまな価値観の存在、さまざまな生き方の存在を彼等に知らしめる結果となり、それらは考え方や価値観の転換をもたらしたり、自分について考えるきっかけとなったようである。

この結果に見るように、若者の留學生活の意義は非常に大きいものがある。留學生活の中で経験したことが、自己を変化させたり、自分の生き方、考え方を变化させるきっかけとなったと感じている者が多い。異文化経験は、自己自身、また自己のその後の生き方を考える上で、大きな影響を及ぼす貴重な体験となっていることが、この面接からわかった。

総合的討論と今後の課題

自己に関する意識の変化に関しては、青年の異文化体験に関するこれまでの研究と、同じ方向への変化が生じた。自尊感情、自己効力感は留学中に高まり、帰国後もその水準を維持するかまたはその傾向があることが実証された。若者にとって留学体験は、自尊感情、自己効力感を高め、自信を持って行動できる方向に人格的变化が生じやすいと言っても良いだろう。

しかし、もとの社会で能力的に高い評価を獲得し、選ばれた者として留学するエリート留学生の変化と、非エリート留学生の変化とは、少々趣を異にすると思われる。エリート達が帰国後にますます自信を持って生活できるようになることはいわば同方向への変化であるが、非エリートの若者達の中には、留学による人格的变化は、異方向に生起した者も少なくなかったのではないかと考えられ、それだけにより劇的な変化であるということが出来るのではないだろうか。

浦上 (1993) は「効力感とは動機づけ概念の一つとして用いられているが、より巨視的な観点に立ち、その動機づけ概念の枠にとらわれず、人生をよりよく送るために必要な心理的な力と解釈することはできないであろうか。」とのべ、効力感と生きがい感との関連を実証しているが、本研究の被験者達も、帰国後は、留学前に比べてより多くの生きがい感を持つことができるようになったのではないかと考えられる。横田 (1997) は自尊心が低かったり、パースペクティブ・テイキングができなかったりする群に肯定的変化がより顕著に表れると述べているが、留学経験は、そのような層については、日本社会での生き方を、より自信を持ってものごとくに当たる積極性を持ち、生きがい感じながら生活するという方向に変えるような影響を生じやすいと言えるだろう。さらに言えば、留学は彼らの生き方の大きな転換点となりうるものとも言えるのである。

今回の結果から、自尊感情と自己効力感の変化の様子を個人のレベルで見ると、変化のパターンに違いがあり、変化のパターンは一様ではないことが明らかになった。集団全体での変化傾向を量的に把握することも大切なことではあるが、一人一人のおかれた立場や経験内容を吟味しつつ比較検討するような質的研究も、なくてはならないものであり、この両面から研究を進めていかなければならないことを改めて確認した。留学や異文化滞在の個人に与える影響についての質的研究は、影響する要因も多く、プライバシーの問題も絡んで研究としては困難が多い分野ではあるが、今後もなお縦断的研究方法による多くの研究の蓄積が必要であろう。

また、若者の異文化経験に関する研究、中でも非エリート集団に属する若者達の異文化経験に関する研究はこれまであまり例がなく、しかも今後さらにそのような若者の留学の増加が見込まれるため、このような対象についてもより多くの研究がなされる必要がある。

本研究の結果解釈の過程で、「社会能力地位」という概念を提出し、留学時の自尊感情、自己効力感の変化のメカニズムを説明することを試みたが（早矢仕,1999）、今後は実証的な研究による検討を行って、この概念を明確なものにしていくことが課題である。

引用文献

- バス A.H. 大淵憲一 (監訳) 1991 対人行動とパーソナリティ 北大路書房
(Buss A.H., 1980 Self-consciousness and social anxiety, San Francisco:Freeman.)
- 早矢仕彩子 1996 外国人学生の日本社会での適応感 名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科- 43,147-162.
- 早矢仕彩子 1997 外国人就学生の自己認知, 自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響 心理学研究 68, 346-354.
- 早矢仕彩子 1999 留学経験と日本人学生の自己に関する 意識の変化-「社会能力地位」による考察- 人文論叢 (三重大学人文学部文化学科研究紀要) 16, 131-146.
- 星野命, 長井進 1988 青年期における異文化体験の自尊感情と自我同一性に及ぼす影響 昭和 61.62 年度科学 研究費助成金研究成果報告書
- 北山 忍 1998 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton Univ.Press.
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Parentice-dunn, S., Jacobs, B. & Rogers, R.W. 1982 The Self-efficacy Scale: Construction and validation. Psychological Reports, 51, 663-671.
- 田中國夫・虎田俊彦・小林昭司 1972 旅行による国家に対する態度の変容について-東南アジア寄港を中心とする兵庫県青年洋上大学の場合- 関西学院社会学 部紀要 25, 11-21.
- 辻 平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 辻 平治郎 1994 自意識過剰の心理学 バスらの自己意識論 梶田叡一編 自己意識心理学への招待 人とその理論 有斐閣 Pp123-134.
- 浦上昌則 1993 効力感と生きがい感 神戸大学発達科学部 心理学紀要 3, 11-17.
- 山本多喜司 1986 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究 昭和 60 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 安福恵美子 1994 海外観光旅行で意識変革は起こるのか 横田雅弘・堀江学編 現代のエスプリ 322 号 異文化接触と日本人 至文堂 135-144.
- 横田雅弘 1997 青年期における留学のインパクト 文化とこころ 多文化間精神医学研究 12, 12-16.